２０２３年7月２日　礼拝説教要旨
ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ４「神の義」
詩編５：５～７、ローマ４：２３～２５

問９～１１の信仰問答に貫かれている信仰は、一言で申しますと「神の義」です。それは教会において自明のことのように思われるかもしれません。しかし例えば、今、起こっている戦争のことを考えても、神さまがおられるなら、なぜこのような悪を許しておられるのかという問いが沸き起こります。この歴史を見ても、繰り返されるアウシュビッツなどの大量虐殺、広島、長崎の原爆、東日本大震災や福島の原発事故。このような人類の苦難の歴史をどう受け止めるのか。また個々の人生に起こる試練、そのようなことに直面するときに、なぜ神さまは自分にこのような試練をお与えになるのかと問うのです。それは神さまの正しさに対する挑戦です。

今日の信仰問答は、そのようなわたしたちの内面を掘り下げて、神さまの正しさを問うことに真正面から向き合います。問９では「神は人に対して不正を犯しているのではないか」問１０では「不従順と背反とを見逃されるのか」と問うています。この問い自体が神さまの正しさに対する挑戦と理解できるでしょう。それゆえ「そうではない」「断じてそうではない」と否定します。そして最後の問１１で「正しいお方であられる」と結論づけるのです。神の義、そこが揺らいではいけません。もし神さまが不正を犯しているとすれば、わたしたちも不正を犯すことになる。神さまが罪を見逃すのであれば、わたしたちも罪を見逃すことになる。神さまの正しさこそわたしたちが正しく生きる根拠です。

問１１しかし、神は憐れみ深い方でもありませんか。
答　確かに神は憐れみ深い方ですが、またただしい方でもあられます。ですから、神の義は、神の至高の尊厳に対して犯される罪が、同じく最高のすなわち永遠の刑罰をもって体と魂とにおいて罰せられることを要求するのです。
ここに注目すべき言葉があります。「神の至高の尊厳に対して犯される罪」とあります。わたしたちは罪をどのように捉えているでしょうか。ある人は自分とは無関係と考えるかもしれません。また失敗、過ちの程度。そこでは罪を過小評価してしまうかもしれません。しかし信仰問答では、罪は神さまの尊厳を犯すことだと言います。それだけ重大なことなのです。

わたしたちは罪人であることが当たり前になっていないでしょうか。みんながそうであれば仕方がない。あるいは事件のニュースを見て、自分はあんなに悪い人間ではない、まだましだ。そう考えて安心したりしていないでしょうか。罪は当たり前なのではありません。異常なことです。しかも神さまの尊厳を脅かすことです。では神さまは初めからそのように人間を造られたのでしょうか。神さまが悪いのでしょうか。問９はこのように答えます。
問９　御自身の律法において人ができないようなことを求めるとは、神は人に対して不正を犯しているのではありませんか。
答　そうではありません。なぜなら、神は人がそれを行えるように人を創造されたからです。にもかかわらず、人が悪魔にそそのかされ、身勝手な不従順によって、自分自身とそのすべての子孫からこの賜物を奪い去ったのです。
ここではこの前の問６にあった人間を良いものとして、神のかたちに造られたことが繰り返されています。「人がそれを行えるように人を創造された」つまり神さまの御言葉に聞き従って生きることができるように神さまは人間を造られた。それだけ尊い存在として人間は生きていま

す。決して罪を犯すのが自然、当たり前ではありません。けれども人間は神さまに背きその不従順ゆえに神さまのかたちを壊してしまいました。だから神さまの栄光、神さまの義を映し出すことができなくなってしまいます。それはアダムに始まり、それに続くすべての子孫からもその尊厳、「賜物」を奪い去る決定的なものになりました。

その罪に対して神さまはどうなさるでしょうか。それが問１０のところです。

問１０神はそのような不従順と背反とを罰せずに見逃されるのですか。

答　断じてそうではありません。それどころか、神は生まれながらの罪についても、実際に犯した罪についても、激しく怒っておられ、それらをただしい裁きによって、この世においても永遠にわたっても罰したもうのです。それは「律法の書に書かれているすべての事を絶えず守り行わない者は皆、呪われている」と神がお語りになったとおりです。

神さまは正しいお方です。ですから当然この罪に対してお怒りになられ、これを追求されます。神さまの至高の尊厳を傷つけたのですから。「それらを正しい裁きによって、この世においても永遠にわたっても罰したもうのです」これは続く問１１で「最高のすなわち永遠の刑罰をもって体と魂とにおいて罰せられることを要求する」という部分にも通じています。ここに神さまの正しさが徹底されています。それゆえにいかに神さまの怒りが大きいか。この神さまの怒りの前に誰一人耐え得ることはできません。

けれども神さまはその怒りをわたしたちにぶつけることなく、愛する独り子に負わせられました。それがキリストの十字架です。イエス・キリストは神さまの怒りを一身に受けて十字架で死んでくださいました。あの「我が神、我が神」と叫ばれた十字架の苦しみ、ゲッセマネの園での苦悩の祈り。それが神さまの怒りを表しています。ルターは「キリストほど死を恐れた者はいない」と言いました。それは人類に対する神さまの怒りを引き受けられた死だからです。そこに神さまの深い憐れみが表れています。

問１１では「神は憐れみ深い方でもありませんか」と問うています。これは問１０の「見逃す」という部分にも通じますが、この問いの中にはただ神さまの憐れみを期待する人間の図々しさ、虫の良さが見え隠れしています。でもそのような人間の図々しさもすべて受け止めて、神さまはその義と憐れみを貫いてくださいました。わたしたちのために十字架で死に、三日目によみがえってくださったキリストの中に、神さまの憐れみと義に生かされるわたしたちの新しい命があります。キリストに結ばれた者は、もはや罪を神さまのせいにしたり、開き直るのでもなく、神さまの正しさを映し出しながら、どのような困難の中でも神さまをほめたたえて生きていきます。

天の父よ。あなたの至高の尊厳を傷つけたのですから、わたしたちは当然あなたの怒りを受けるべき者です。けれどもその怒りをあなたは愛する御子に負わせられました。そのようにしてあなたは正しさを貫かれ、その憐れみを表してくださいました。どうぞキリストに結ばれて、わたしたちをあなたの正しさ、義に生きるものとさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。